

山路廣明『昭和初期に於けるイスラム教見聞録（東京地方）』公開に当たって

川村光郎（かわむらみつお・駱駝舎）

ここにご紹介する山路廣明（やまじひろあき）氏の『イスラム教見聞録（東京地方）』は、B6判、本文20頁、モノクロ写真6頁という小冊子である。本文は山路氏の手書き謄写版刷りである。私が所有する小冊子は山路氏が所有していた原本を山路氏が私のために自らゼロックスコピーして送ってくださったものなので、原本はどんな用紙に印刷されたものなのか不明であるが、副題に『言語集録』別冊とあることから推測するに、おそらくわら半紙だっただろう。他の『言語集録』がわら半紙に印刷されているからである。

挟み込まれた紙片には山路氏自筆の「表紙・奥付紛失」の文字が書かれている。そしてB5二つ折り13枚の紙を二か所糸で綴じた上からA4のコピー用紙でくるみ表紙を付け、B6判の本文に合わせて余部を切り取ってある。その表紙に山路氏がボールペンで手書きした表題は『昭和初期に於けるイスラム教見聞録（東京地方）』『言語集録』別冊 となっている。本篇の〈はしがき〉では『昭和初期に於けるイスラム関係事情（東京地方）』と書かれている。「イスラム関係事情」か「イスラム教見聞録」か、どちらが正しいのか。ただ『…イスラム教見聞録…』は山路氏が恐らく記憶の中で書いたものなので『…イスラム関係事情…』が本来の表題であろうと推測する。早稲田大学図書館が所蔵する「大日本回教協会寄託資料」を調査した店田廣文氏の論文の「引用・参考文献」の中に答えがあった。山路廣明,1999,「昭和初期に於けるイスラム関係事情（東京地方）」『言語集録』第20号・別冊とある（店田廣文「戦中期日本における回教研究—『大日本回教協会寄託資料』の分析を中心に」早稲田社会学会『社会学年誌』47号 2006年3月）。これが正式な表題である。

筆者の山路廣明氏は1910年（明治43年）に生まれた。出生地やどのような経緯で山路家の養子になったのか全く不明である。1988年に千葉県君津市の介護付き有料老人ホームに入居、2008年に亡くなられた。98歳であった。夫人も後を追うように同年亡くなっている。2004年に『英語の語根表』を自費出版していることから晩年も言語研究への意欲を失わなかったことが分かる。

戦前・戦中期の様子についてはご本人が本篇で触れている。若い頃古代エジプトの言語を研究するためにカイロ大学留学を目指してまずアラビア語を勉強しようとした。早稲田大学政経学部・文学部教授（西洋史・政治学、『外交時評』誌でも活躍）の煙山専太郎氏の紹介で内藤智秀（1886-1984, 東京帝大で西洋史を修め外務省で中東勤務、研究者に転じ東京女高師〔お茶の水女子大の前身〕教授、中東イスラーム研究の草分けの一人）と出会い、その内藤氏は「日本回教文化協会」を紹介してくれ、山路氏はこの協会の会員となってようやくアラビア語をトルコ人講師から直接習い始めるとともに、イスラームと接触することになる。古代エジプト語については、『古代エジプト語の形態について』（1993）、『古代エジプト語の話』再編（2003）、『古代エジプト語の文法と動詞』（2003）をいずれも小冊子ではあるが自費出版をしている。言語に対する興味は尽きず自ら「南方言語研究所」、「アジア・アフリカ言語研究室」と称して、ガリ版刷り、B6判でダイヤル語雑誌「ラヘヤル・ビラク」、アイヌ語雑誌「アイヌ・モシリ」、『シサム・アイヌ・イタク・ウプシ・カンビ（和・ア

イヌ語辞典』(203p. 1959)、『女真文字の製字に関する研究』(461p. 1958)、『契丹製字の研究』(76p. 1956)、『ラーマ王子物語』(Hikayat Melayu 馬來〈マレイ〉語対訳)(2,75p. 1943)等々、アラブ・イスラーム関係では、「ローマ字で読むコーラン」(『サウディアラビア』1967/1968)、『アラブ語形態論』正・続1-14、『アラビヤ語のtriliteralismとbilateralism』(言語集録1, 1952)、この『言語集録』では初期の頃は夫人の山路きみ子の筆名でも4本の論考を発表していたと思われ、1950年から1975年まで勤務した早稲田大学図書館の「紀要」にも「Arabic lexicographyの諸問題」と「コーランにみる異形の語その他について」を寄稿している。

私が山路氏と知り合ったのは、回教圏研究所が1938年7月から44年末まで発行した月刊誌『回教圏』全69冊を復刻(1986)する数年前のことではなかったかと思う。そのきっかけを作ってくれたのは早稲田大学でも講座を持っていた矢島文夫京都産業大学教授か当時早稲田大学図書館の受入係主任の植田覚氏(マヤ文字研究者)かのいずれかで、既に早稲田大学図書館を退職されていた山路氏を杉並区阿佐谷の関東バス車庫裏にあったご自宅にお訪ねした。たぶんその頃私が関心を持っていた来日タタール人について話を伺うつもりが、山路氏が関わっていた大日本回教協会の話となり、お手持ちの資料や写真を見せていただいた記憶がある。その後『回教圏』復刻の作業をしていたときに回教圏研究所所長大久保幸次の遺品の中に大隈重信を囲んだタタール人・日本人の集合写真等があり、写っている人々の名前を知りたくて数枚の写真コピーを山路氏に送った。しばらくして受け取った返事は、しかし、写真に写っている人たちの名前は分からないというものだった。全員の名前は分からないにしても幾人かは知っているはずなのにな、と思いつつ、その後こちらから連絡を取ることもなく過ごしていた。2005年初め頃に突然山路氏から封筒を受け取った。なぜ連絡をよこさなかったのか、引っ越し(終の棲家となった君津市の介護付き有料老人ホームが開設したのが1988年)したので前にお見せした資料や写真は焼き捨てたというお怒りの手紙と共に入っていたのが『昭和初期に於けるイスラーム教見聞録(東京地方)』である。いま思えば大変申し訳ないことをしたと反省するばかりだ。なお、「言語集録」は第27号まで出版したとのことであった。

今回山路氏の回想文を信州イスラーム世界勉強会で公開するに当たり板垣雄三代表に読んでいただき下記の感想をお寄せいただいたのでご紹介する。

私が山路さんにお会いした最初は、1963年ごろ、松田寿男さんが大村謙太郎さんの遺志を継いで大日本回教協会の新生として日本イスラーム協会の設立を提案相談する会合を、前嶋・野原・蒲生・嶋田さんら・そして若輩の私を大隈庭園に呼び集めて開いた頃だったと思います。何度かお会いしました。今回、川村さんのお手許の原本コピーの内容に触れ、山路さんからだけでなく小林元・前嶋信次・野原四郎・蒲生禮一・幼方直吉といった先生たちからも、私は聞いたことがなかった情報を見出しました。1930年代日本で、研究者次元とは異なる市井ないし民間レベルにおけるイスラーム熱ないしアラビア語熱、またそこに介在した諸外国からのムスリム在留者に関する情報が、それです。研究者や研究機関や研究内容などについての情報は比較的乏しく、かつ混乱していたり明らかな誤りだったり(例えば日本イスラーム協会が早稲田大学文学部に吸収されるという誤った系譜の独り合点や会長交替の不明確さなど、外務省回教班についても混乱、満鉄東亜経済調査局や大川周明は全く無視)します。山路さん自身、高齢化で幾分か記憶が混乱してきたことは争えないところでしょう。これらに比して、在留ムスリムたち

の面々の活動ぶりや阿馬土アフマドこと有賀文八郎（同志社大や京大のキリスト教学教授となる鉄太郎の父）のイスラーム布教活動ぶりや、中岡良一はある程度知られているとしても佐久間貞次郎夫妻や大塚の中村正勝や沼津のアブーバクル長倉の動きや、菊地慧一郎の「韋駄天アラビア語」教室、『回教世界』の編集制作作業にあたる事務方の人々など、の情報に、この山路文書の注目すべきメリットが潜んでいるように見えます。

本篇原文では人名等の固有名詞等の後ろにアラビア語、トルコ語、タタール語がアラビア文字で表記されてあるが、パソコンでは入力できない文字もあるためこれらをすべて省き、ローマ字で表記してある。ただしこの翻字も便宜的に加えたに過ぎず特定の方式に従ってローマ字化したものではないことをお断りしておきたい。明らかな誤字は正してあるが、その他は原文のままに残し、筆者の誤認と判るものおよび編者が注釈を加えた方が読者の理解に役立つと判断した場合には、その文節の後に1行開けて段落を変え、文字の大きさも落として書き加えた。また本文中にある丸括弧（ ）内の注記は筆者山路氏によるものであり、山括弧〈 〉内の注記は編者川村によるものである。

なお、人名についての注記は、一部編者が入れたところもあるが、コロナ禍の影響で国立国会図書館が予約抽選で利用者制限するなど公立図書館の利用ができず、また編者の知識・能力には限りがあるため板垣雄三氏にお願いし、また今回の作業全般にわたるアドバイスもいただいた。しかしながら本篇すべての内容・表現についての責任は編者にあることを明確にしておく。

追記

今回山路廣明氏の覚え書きを紹介するに当たり、注釈を加えるためにいくつかの資料を見直しているときに思わず声を上げそうになるほど驚いたことがあった。それは1938年5月12日東京回教学院〈一般に東京モスクまたは東京マシドと呼ばれた〉の開堂式で日本政府を代表して内ヶ崎作三郎文部政務次官が文部大臣木戸幸一の代理として冒頭に祝辞を述べたということであり、それから4ヶ月後に発足した大日本回教協会の評議員の中に内ヶ崎作三郎（1877-1947）の名前を見つけたことである。内ヶ崎は私の母方の姓である。宮城県黒川郡富谷村（2016年富谷市となった。いま仙台市のベッドタウンとして発展している）の出である。ここに県内最古の「内ヶ崎酒造店」（1661年創業）がある。江戸時代には奥州街道の宿場町で本家は本陣であった。私の母は分家の荷宿の出身。作三郎の生家もまた分家の内ヶ崎醤油店。彼は旧制二高を経て東京帝国大学文学部英文科でラフカディオ・ハーンに英語・英文学を学び、オクスフォード大学マンチェスター・カレッジに3年間留学して宗教学を学ぶ。帰国後は大隈重信の要請により早稲田大学教授として文明史、文化史を講じながら同時に三田の統一基督教会（後に自由基督教会を設立）の牧師でもあった。実は二高の学生時代、仙台市の尚綱学院の前身である尚綱女学会の初代校長アメリカ人宣教師アニー・S・ブゼルが開設したバイブル・クラスで英語と聖書の勉強をしており、同じクラスにいた吉野作造と共に洗礼を受けていたのである。私の母は作三郎の影響もあったのか尚綱女学校に入り家政科の第1回卒業生となっている。戦後作三郎が亡くなった後も巣鴨にあった家を幾度か訪れていることが日記に書かれているから近い間柄だったのだろう。デモクラシーを「民本主義」と翻訳して大正デモクラシーの中心となった吉野作造とともに歩んだはずの内ヶ崎作三郎がなぜ政界に入ったのか。自由基督教の政治家永井柳太郎、星島二郎、安部磯雄、鈴木文治、河上丈太郎などの活動と関連があるのか。主

権が天皇にあることを前提とする民本主義の限界でもあったろうが、基督教世界にとどまらず現実の社会問題に眼を向ける仲間たちの影響も大きかったのであろう。1924年憲政会より出馬して当選、第一次近衛内閣では文部政務次官、大政翼賛会総務、衆議院副議長も務め、戦後は公職追放となった。

ついでに記録しておきたいことは、児童文学者である神沢利子（三鷹市在住。1924-）氏が若い頃回教圏研究所に勤務していたということである。2021年1月29日には97歳になる。おそらく回教圏研究所の関係者としてはただ一人の存命者であろう。月刊『回教圏』復刻に際して大変お世話になった石井茂晴氏および京夫人（お二人とも故人）から幾度も聞いたことである。

追・追記

この追記に関連して、信州諏訪から仙台の尚絅女学校に学んだ伊藤千代子（1905-29）という存在が近年注目されていることを板垣氏から聞いた。1924年、彼女は尚絅の英文予科（1カ年）をステップに東京女子大（2年に編入）に進む（1925）が、社会科学を学び実践するうら若き女性が官憲の拷問に曝され、結婚相手（浅野晃）は弾圧に屈して転向、彼女は精神を病み24才で仆れる。知友から愛された彼女の短い苦闘の生涯を記念する動きが、最近になって拡がりだしたようだ。山路文書を信州イスラーム世界勉強会で披露するに当たり、不思議な縁由のネットワークが次々と見えてくることに感慨を覚える。

伊藤千代子と同年に生まれた私の義母（旧姓新船塩子）は長野県南佐久郡佐久穂町曾原の鍛冶屋の娘として生まれた。先に上京していた兄を頼って東京に出た直後、関東大震災に遭う。実践女学校卒業後は高階鳥類研究所で働きながら1928年に結成された左翼劇場に入団、演劇活動をしていたことがあった。どこかで伊藤千代子とすれ違っていたかもしれない、とふと思う。



表紙・奥付紛失

昭和初期に於けるイスラム教見聞録（東京地方）

『言語集録』別冊

『昭和初期に於けるイスラム教見聞録（東京地方）』の表紙
本来の表紙と奥付を紛失した旨の書き付けが挟まっていた

昭和初期に於けるイスラム教見聞録（東京地方）

——『言語集録』別冊——

山路 廣明

はしがき

本誌〈『言語集録』〉は言語研究誌であるにも拘わらず、本号では「昭和初期に於けるイスラム関係事情（東京地方）」についての特集号を執筆したのは筆者がこの時分より60年間もイスラム関係に携わってきたいきさつがあり、その記録が消えようとしているからで、今のうちにそれを書き留めておかないと日本に於ける東京方面のイスラム事情が消滅してしまうと思われる。併し筆者の見聞した詳しい記録は、昭和20年応召を受け同年2月14日横須賀海兵隊へ入団している間に家は戦火に遭い各種の研究記録と共に悉く灰燼に帰ってしまったため、今日では完全とは言えない記憶のみが残ることになり、それも年月の流れと共に次第に薄れてきている。

尚、この話中私的事項に亘る部分は中略とせず……で表した。又記憶だけに頼るために話が相前後する場合がある。

平成10〈1998〉年11月3日

執筆・編案者識



最初に、筆者の研究目的はイスラム教そのものではなく、他の号にも載せたように古代エジプトの言語であり、そのためアラブ語を勉強しようと思い、カイロ大学を目指したが、家には老人ばかりのため目的を果たさずにいたところ、早大の煙山専太郎教授（西洋史）の紹介でお茶の水女子大学教授でトルコ史・オスマントルコ語専攻の内藤智秀博士にお目にかかり、博士の紹介で東京駅八重洲口（元市電中橋広小路電停）角のふとん店の一つ銀座寄り隣の建物の二階にある「日本回教文化協会」の会員となって、南京から来日したメヘメット・ラーイフ・ベイ Mehmet Rā'if Beyによるアラブ語の直接指導を受けた——アラブ語学習の苦心談については第14号参照——そしてこの時アラブ語の本当の発音を耳にすることができた。その時先生の使用した教科書はトルコ文で説明してある赤い表紙のあまり厚くない本で書名はアラビア文字で「アラブ語文法」であった。この時分この協会の会員でこの講習会に出席された記憶に残る主な人は東京帝大出身の西洋史家・小林元〈1904-63, 当時は駒澤大学教授〔イスラーム研究〕、戦後は中東調査会創設者〉氏、慶応大学のアラブ音楽研究家・飯田忠純〈1898-1936, 慶應大学出身イスラーム法制研究からアラビア音楽の研究家〉氏等全部で12, 3名だったと記憶している。小林元氏には訳著書があり、飯田氏は富山房大百科事典にアラビア音楽についての研究が載っている。

内藤〈智秀〉博士は〈アラビア文字に代わる〉トルコ新文字としてのローマ字によるトルコ語学習書の編纂に取りかかれた。この原本はトルコ人イゼット・ハミット氏‘Izet Hamidの著で説明はすべてフランス語で書かれたものであまり厚くないものの中のアラビア文字をすべてローマ字に置き換えたものであった。先生は又、日土・土日のやはり新ローマ字による辞書を編纂しておられ、この間筆者もお手伝いしたこともある。後にこの両方は日土協会から出版された。（以上述べた図書資料はすべて早大図書館に収蔵されてある）

筆者はこのイスラム〈文化〉協会へ入会したのがイスラムに関係した第一歩であったと記憶している。併し当時はこの協会へ就職したのではなかった。

〈小村不二男（1912-98, 日中戦争期の西北中国で回民工作責任者だった）『日本イスラーム史』（1988）によれば、「日本回教文化協会」は昭和11（1936）年12月、今岡十一郎（1888-1973, ハンガリー研究者・ツラン主義唱道）、笠間昶雄（1885-1945, 外交官）、松本徳明、内藤智秀、渡辺鋳藏（1885-1980, 反マルクス主義の経済学者、戦後「東宝争議」を壊滅させた東宝社長）が発起人となって設立され、事務所を京橋区西銀座6-5に置いた。煙山専太郎は発起人の一人として名を連ねている。これを発展させた組織として昭和12（1937）年5月「イスラム文化協会」が設立される。遠藤柳作（内務官僚・満州国高官を経て貴族院議員）を理事長に、理事には江藤夏雄、笠間昶雄、内藤智秀、匝瑳胤次（そうさ・たねひろ、海軍軍人で思想戦を重視）、渡辺鋳藏、山下知彦（海軍軍人で陸軍皇道派と通じる）が顔を揃えている。事務所は麹町区内幸町の太平ビル別館にあった。この年10月には機関誌『イスラム：回教文化』第1号を発刊、1939年1月の第6号で終刊した。短期間ではあったが「イスラム叢書」として出版活動も行っていった。『支那回教徒について』（1937）、『回教の全貌：明日の世界勢力』（Paul Schmitz, 1938）、『アルジェリア、チュニシア、及び（リビアの）トリポリタニア経済事情』（1938）、『坩堝に滾る印度回教徒』（Halid Edib, 1938）、『モロッコ経済事情：フランス領モロッコ、スペイン領モロッコ、タンジール地方』（英国貿易省, 1938）。イスラム文化協会は1938年9月に設立された「大日本回教協会」に吸収合併されて終焉。大日本回教協会は1939年4月『回教世界』を発刊したが、1941年12月で終刊となった。

「日本回教文化協会」が発足するよりも前の昭和7（1932）年2月に「イスラム文化研究所」が設立されている。奔走したのは飯田忠純、内藤智秀、大久保幸次（1887-1947, 東京外国語学校でドイツ語を修めたがトルコ学専門家となりイスラーム研究を牽引）、小林元の4人であった。翌1933年の11月にイスラム文化研究所主催でトルコ語・アラビア語・ペルシャ語の講習会を行っている。アラビア語の講師はメフメト・ラーイフであった。

しかしこの流れとは別に、1933年10月大久保幸次が「イスラム学会」を設立、34年5月から東京外国語学校の教室を借りてトルコ語講習会を行った。大久保幸次（駒澤大学教授）、小林元（駒沢・日本大学講師）、松田壽男（1903-82, 東京帝大東洋史卒で内陸アジア史が専門、國學院大学教授、東京文科大学講師）、宮城良造（東京帝大西洋史卒、パレスチナ問題に取り組む）、八木亀太郎（1908-86, 言語学者、東京帝大講師）が理事となっている。このうち八木を除く4人が1938年4月に大久保を所長として発足する回教圏研究所（後回教圏研究所と改称）のメンバーとなる。宮城は期待された若手研究員だったが着任から時経ず1940年病没。〉

昭和9（1934）年の春早大文学部史学科西洋史（古代エジプト史 — 定金右源二教授）を卒業した頃は就職難の時代で、中々就職が難しく自分の希望を捨てて何でも何処へでもいいから就職口があ

ればいいという時代で、筆者もその例に漏れず就職難に困っていた。……

〈1929年10月24日に米国ウォール街で発生した株価の大暴落は世界恐慌となって日本経済も大きな影響を受け不況は30年代後半まで続いた。後にイスラム文化協会で机を並べることになる東京帝国大学東洋史出身のモンゴル帝国史研究家村上正二〈1913-99,戦後は東洋大ついで東京都立大教授、『モンゴル帝国史研究』『モンゴル秘史』〉氏もその一人だった。なぜ大日本回教協会で仕事をしていたのかという私のぶしつけな質問に対して、村上氏は「当時はともかく就職先を探すのが大変でどこも受け入れてくれなかった。潤沢な資金を持っていたのは唯一回教研究機関だった」と答えてくれた。小津安二郎の映画「大学は出たけれど」が流行語となっていた時代である。〉

その頃浅草の山路家へ一人の老人が一人の小柄で色の黒いにこやかな青年を連れて訪れてきた。その老人の名は阿馬土〈アフマド〉・有賀文八郎と謂い元浅野セメントの重役で、養父（山路家の主人）の旧来の友人であった。

この老人は長年印度に滞在してイスラム教に入教し、日本へはイスラム教宣教師として帰朝したので、養父にイスラム教の話をし、入教を奨めたが、自分は親鸞の信奉者であるからイスラムには入教しないが孫が何かそんなことをやっているからと言って断ったので阿馬土老は以後筆者に近づいてきた。同行して来た青年はスマトラ人で名をモハメッド・マハユディン・ガウスとって医師希望、後に慈恵医大へ入学し、後シンガポールへ赴任して行ったと聞いている。

〈山路廣明氏が「養父」と呼び、その養父が廣明氏を「孫」と呼ぶ「山路家の主人」は、恐らく大日本回教協会の評議員として名を連ねている山路一善(1869-1963)のことであろう。松山出身の海軍中将、海軍航空生みの親と言われる。司馬遼太郎『坂の上の雲』に描かれる日露戦争でバルチック艦隊を破った秋山真之と海軍兵学校で同期。本篇最後に現れる「ボルネオから迎えに来る」山路大佐は長男一行(1900-?)のことで、彼は太平洋戦争終結時の築城(ついき)海軍航空隊の司令官であった。一行の下には5女がいる。〉

阿馬土氏は養父に読むようにと『聖香蘭経』という一冊の本を呉れ、又『イスラム教とは如何なるものでありますか』というパンフレットもくれた。この『聖香蘭経』はコーラン聖典の翻訳であるが、それを訳すのはかつての聖書の翻訳者である高橋五郎氏との共訳であると言った。その底本としてはEveryman's Library中Rodwell氏の〈英〉訳本からの重訳であると言っていた。阿馬土氏は京都居住が本宅であるというが娘の婿が東京の人なのでそこへ寄寓しており、場所は目黒の白金三光町にある女婿の豪邸であった。

養父が何故この老人と知り合いになったかについては残念ながらつい聞き漏らしてしまった。阿馬土氏は内藤〈智秀〉博士とは親しくしなかったようで、博士のことは何も話に出なかったが、老人は大抵毎日都内各所に伝手を求めては宣教に歩いていて、当時上海から帰国していた回教徒の佐久間貞次郎〈1886-1979,上海で「回光」誌発行〉氏(〈ムスリム名〉エリヤス氏)とも親しくしていた。

尚この人〈阿馬土氏〉本人の記述についてはイスラム文化協会発行の『イスラム〈:回教〉文化』第3号あたりに掲載されている。阿馬土氏はアラブ語は知らないが、英語は達者で、筆者を二、三のイスラム国大使館へ連れて行っては色々話し込んでいたが、帝国ホテルへ行ったときには丁度神戸からエジプト領事のMaḥmūd Fawzy Bey(後に外務大臣)が上京していて、氏と話し、私にコーラン

の一節とShahādah〈シャハーダは「信仰告白」を意味するアラビア語で、「アッラーフのほかに神なく、ムハンマドはアッラーフの使徒である」と表明すること。その言葉は礼拝のたびに唱えられるし、また異教徒がイスラームに改宗する際は二人以上のムスリムの証人の前でこれを唱えることが要件〉を言うように〈阿馬土氏が筆者に〉言ったところ、Beyは喜んで私にイスラム名'Aly〈アリー〉をくれて、自分のポケットノートにそのことを金色の短いシャープペンシルで記したが、実は筆者はイスラム教徒にしてくれと阿馬土氏に言ったことも頼んだことも全くなく、阿馬土氏の独断でそうしたのであり、実はある理由のもとにこの'Alyという名はつけてもらいたくなかったのであるが、以後何となくイスラム世界と歩を共にして来た。

併し就職難は相変わらず厳しかった。……或る日、日比谷の公会堂前に居た時、丁度後〈前〉方が太平ビル別館だったが、〈左手〉向こうの角の竹葉亭の方から阿馬土氏が二名の男の若者をつれてやって来て筆者に引き合わせた。

その一人はジョクジャ (Jogja — 正しくはYōgya-kartaと言う) の人Adham Basori君、他の一人はやはりジャワ在住のサーリム・オマル・スンカル君であった。サーリム君はハドラマウトの出身だという。以来この二名は当時浅草馬道の大区画整理 (昭和4年) で新築した拙宅へ来て日本語の勉強をした。外国人に日本語を教えたことのない筆者は相当苦労したが、少し後にはやはりジャワから来たユースフ・ハサン君の質問攻めによって自分も日本語の勉強をし、ために以後大変教えよくなった。……かくして次々とインドネシアの人々が来て何とか毎日用事が増えていた。

故あって永年住み慣れた浅草から大塚 (都電の車庫横左手裏) へ越してからはよく夜分小石川の原町近くにある内藤博士宅へ足を運んではトルコ語のアルバイトを頼まれていた。

〈市電の大塚車庫は地下鉄丸ノ内線の茗荷谷駅の近く窪町小学校の向かい側にあり、春日通を渡って旧東京文科大学 (後に東京教育大学) を抜ければ千川通を隔てた先が旧小石川原町となる。昭和6、7年頃に中村正勝、永倉与四郎、上谷一雄、山路廣明らが開設した「アラビア・トルコ語学会」 (一年後に「イスラム協会」として発展解消した) は中村正勝の自宅を事務局にしたが、いまの竹早公園 (小石川図書館) の隣で春日通と千川通の間にあり、いずれも市電大塚車庫からは徒歩圏内にある。〉

阿馬土氏は印度でDelhiかNew Delhiの〈誤り。正しくはウツタル・プラデーシュ州の都市〉ヴリンドーヴァンVrindavanに住む藩王RajaのMahendra Pratap〈1886-1979、マヘンドラ・プラタップ〉氏の邸宅に寄寓してイスラム教を学んだことが分かったが、同氏〈Mahendra Pratap氏〉は戦後再度来日して、尾崎記念館で会を開いて、招待状を受けたことがあるが出席しなかった。この時には既に阿馬土氏は他界していた。このラージャについては既に頭山満〈1855-1944、日本のアジア主義的國家主義の巨頭で、軍が招き入れたロシア・ムスリム諸民族の精神的指導者アブデュルレシト・イブラヒムとの親交も深く回教徒支援にも熱心だった。インド独立の運動家プラタップをも支援していた〉氏門下の若林半〈『回教世界と日本』 [1937] の著者〉氏の妻女ふじさんから知り合いと聞いていた。

ここで話を一転して外国人のイスラム教について記してみよう。

明治末年か大正の初期頃ソ連領シベリヤ、主にタタルスタンからロシア革命を避けて「避難者」muhājirīnとして日本へ移住してきたタタル人の一行が居た。その指導者は〈バシキール民族運動

に根をもつ) ムハメード・ガブドゥルハイ・クルバンガリー師Imām Muḥamad‘Abdul-ḥai Qurbān‘ali (1889-1972) であるが、一行の者は大正年間には生計を立てるのにロシアや服地を商っていた。子弟が増えるにつれ、その教育問題その他、日本の社会と生活様式を異にするイスラム教徒のことを考え、クルバンガリー師は回教徒の生活向上のため代々木上原に回教学校(1927)を開いた。師は昭和2年か3年頃新宿の表通りにある「東京ホテル」で第一回の回教徒大会を開き、集会者100人ほどの盛会であった。次いで師はカザン市よりアラビア文字の活字を購入、学校隣に回教徒印刷所Matbağa İslāmiyeを設けて(1929)、「回教暦」taqwīm、トルコ・タタール語による教科書及び総革製のコーラン、及び「コーランの七分の一」と称するうぐいす色のハフテヤク・シャリーフhaftiyak sharifそれに「新日本情報」と称するヤニ・ヤポン・モフビリYāni Yāpōn Mohbiri誌(トルコ・タタール文)を発行して、主に事業の活動報告を行っていたが、何号まで続いたか聞いていない。

一方師はイスラム教を日本人に理解してもらうためとタタール人との文化の交流のために神田神保町(市)電停(留所)より九段に向かって左側、書店の並んでいる側にある蒲団店の二階を借りて「アラビア・トルコ(語)学会」を開き、アラビア語を教えていた。その教科書にはロンドンのマールボロ社で出しているArabic Self-Taughtを使用していたと言うが、師はアラブ語の学習書としてはOttoの文法書を推していた。

〈マールボロ社の独習書としては“Marborough’s Arabic (Syrian) Self-Taught” 128pp. か兵士や旅行者用につくられた“Egyptian Self-Taught (Arabic) with the English transliteration of every word” 72pp. の2種類しかない。Ottoの文法書とは、多分 G.W. Thatcher: Key to the Arabic Grammar of the Written Language: Method Gaspey-Otto-Sauer. 1927. のことであろう。

クルバンガリー(1889-1972)はロシア革命(1917)時に白軍のボルシェヴィキ派と共に赤軍と戦い、ボルシェヴィキの死後、極東ロシアの利権を確立しようとする日本軍の保護の下満州に逃れた。1920年と21年の2回、当時ハルビンの特務機関長だった四王天延孝(1879-1962、陸軍軍人でフランス従軍のヨーロッパ体験からユダヤ陰謀論を唱える)の手づるで来日し、1924年東京に移住。翌年東京回教団を組織してからは在日タタール人のために上記のような活動を積極的に行った。何よりも東京に回教学院礼拝堂を造ることに熱を入れた。一方でロシア領内のイスラーム諸国の独立を目指して日本側の協力を求めるべく陸海軍、政財界、国粋主義右翼団体へ働きかけて人脈をつくっていた。例えば、1921年11月から行われたワシントン海軍軍縮会議に出席する徳川家達全権大使にバシキール民族代表者として独立運動の支援を求める書簡を送っている。「…露国在住マホメット民族即ちバシキール族、キルギス族、カザン韃靼族、ツルケスタン族、アザルバイジャン族、クリミヤ韃靼族は今回の華府会議に対して多大の注意を払ひ居り然して早晩列国に依り独立を承認せられん事を期待し居り候。華府会議に出席し得ざる露国在住四千万のアジア民族は黄色人種の保護者、人道の擁護者、人種平等の提唱者たる日本帝国派遣全権委員各位に対し最も大なる期待を有し居り候。日本全権委員は世界永久の平和人種平等に対する保証及虐げられし吾々アジア民族の独立に対して御尽力あらん事を切望致候…」(1921年10月6日付)〈

昭和9(1934)年より昭和12(1937)年の頃わずか3年程の間、イスラム事情(或は事業)に「東亜の経綸」をモットーに(1934年の満州帝政実施、1937年の盧溝橋事件を契機とした日中戦争勃発の流れの中で「欧米列国の抑圧に苦しむアジア諸民族の解放」を旗印に皇国日本を盟主とする「大東亜新秩序」を求める声が軍部を中心に政財界や国粋主義右翼に高まっていた)右翼団体の頭山満

氏一派がこの方面〈イスラム〉に関係を持ち、その費用の出所は分からないが、第二回メッカ巡礼団の組織を図り、頭山四天王の一人、田中逸平 (Nūr Muḥammad Tanaka) 〈1882-1934,台湾協会学校〔拓殖大学の前身〕出身、山東省済南で入信し『白雲遊記』を刊行、マッカ巡礼は2回目〉を団長とする一行は巡礼を果たした。その一行に加わった人々の中で記憶に残っているのは郡正三、山本太郎、榎本桃太郎その他の諸氏、筆者も一行に加わるように声がかかったが、生憎近くの診療所でもらった薬に当たり、身体が弱り切っていたので、その準備に当たっていた本郷吉祥寺に居住の若林半氏 (頭山氏一派の人) に断った。氏は巡礼団一行の出発に先立ち、巡礼に経験深い来日中のアブドゥル・ラシッド〈トルコ語読みではアブデュルレシト〉・イブラヒム師 al-Qāḍī 'Abudul Rashīd Ibrāhīm (中央アジア出身でトルコ国籍) を招いて同行者に巡礼の心得を話した。通訳はアハメッド・アルテンバイ氏 Aḥmad Altunbāy。

無事巡礼を終わって帰朝した一行はザムザムの井戸からの聖水とカアバに掛かっている黒布の断片を持ち帰り筆者も見ることができた。帰朝後、団長の田中氏は浅草蔵前の浅草病院で加療していたが、亡くなった。四天王の名は田中天鐘。その葬儀は盛大に青山斎場で行われ、祭司はイブラヒム師がつとめコーランのヤースィーンの章の朗読があった。

この時分駒沢大学で教鞭をとっていた大久保幸次教授 (現代トルコ語) は東京外語の蒲生礼一〈1901-77〉教授 (インド語、ペルシャ語) 等と代々木に「回教圏攷究所」〈後に回教圏研究所と改称〉を設けて『回教圏』という〈月刊〉雑誌を発行したが、これは研究誌として今なお学術的に高く評価されているという。筆者はまだ一度もこの攷究所を訪れたことはなかったが、阿馬土氏はこの会に関係していた吉村牧師と親しくしていて時々会っていたという。

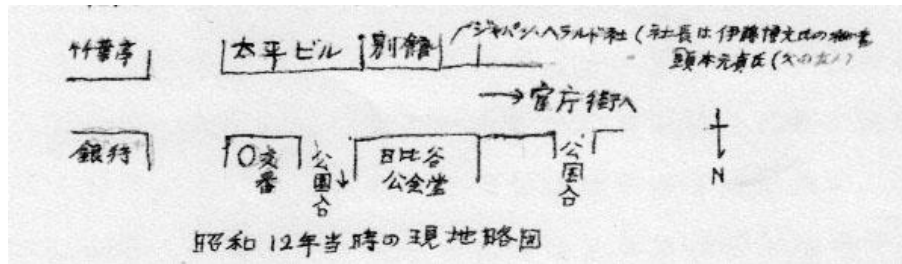
戦後大久保教授は早大で講座を持ったことがあるが、イスラム学についてだと聞いている。同氏は後に大腸がんで死去された。同氏は渋谷の金王町に居住され、小林元氏も近くの居住であった。尚、小林元氏の著書としては T.E. ロレンス著・小林元訳『砂漠の反乱』 (世界ノンフィクション全集、筑摩書房刊、1960) がある。

〈「世界は3億、支那は5千万の信徒を擁し、信仰の堅き団結力のもとに熾烈なる民族復興運動を続けている回教徒は、東洋の盟主と仰ぐ興亜日本に対し一斉に提携の手をさしのべてゐるが、我国でもこれに応へて最初の「回教圏研究」の大学講座が今春から早稲田大学に正式採用されるに至った。新学期から早大に開講される回教圏講座「回教圏史」は文化史的見地から世界3大宗教としての古き伝統を持つ回教文化及び回教諸国の興亡史から回教徒、回教圏の現状、更に列国の回教政策、日本と回教圏との関係にまで及ぶ国策講座で、文学部史学科の必修、哲学科の選択科目と決定、最初の正式大学講座として各方面の注目の的となっている。…… (昭和14年4月21日の「都新聞」)

講師は大久保幸次駒澤大学教授であった。一方、「我国官立大学最初の回教史講義開設」として、同じ4月から東京文理科大学でも回教史の講義が内藤智秀の担当で始まった。朝野を挙げてのイスラム・ブームとなったのである。〉

昭和13〈1938〉年になると嚮〈さき〉に紹介した日本橋にあった「日本回教文化協会」は外務省の外郭団体として、事務所を日比谷公会堂裏通り、前述の太平ビル別館の3階に置いた。就職難の日々、筆者はよく散歩して通るこの会社へ前日就職を申し込んだばかりで、内藤〈智秀〉博士からこ

の会社の真上にある「イスラム文化協会」への職員として（採用）の通知を受け取った時には、その奇縁のような現象には不思議に思った。



〈ジャパンヘラルド社（英国人による日本最初の英字紙。1861年横浜で創業）は山路氏の記憶違い。正しくはジャパントイズ社のことで 1897年に伊藤博文の支援を受け山田季治を社長、頭本元貞を主筆に、日本人による初の英字新聞として創刊された。竹葉亭は江戸時代創業の老舗鰻屋。〉

このような不思議な現象はこの時ばかりでなくたびたび経験した。〈大日本回教〉協会の会長は陸軍大将林銑十郎氏、理事長は議員の遠藤柳作氏、理事には内藤博士、笠間昶雄公使、海軍少将匝瑳胤次氏〈そうさ・たねひろ〉氏、常勤職員としては元外務省ペルシャ語通訳官村田省三（またの名は愛次郎）氏、是則高作氏（英語）、事務係の滝田某氏、女性タイピスト及び新聞係のおていちゃんという女の子で、研究員としては東大出の八木亀太郎（ペルシャ語）、同じく東大出の村上正二氏（現東京都立大学名誉教授）、及び筆者の3名で、前二者は週二、三回の出勤、私は毎日勤という構成であった。この協会の目的はイスラム教国の研究と同時に日本文化をイスラム諸国に紹介することを目的とし、最初の計画では「日本」という雑誌をアラブ語、ペルシャ語、トルコ語の三か国語で発行する予定であったが、ペルシャ語、トルコ語の出版・作成・発行は見合わせとなり、独りアラブ語のみの原文誌となり、アラブ語よりキーの数の多いペルシャ語用のUnderwoodの機械を購入して、それを筆者が打つことになったがモーターが英文タイプとは逆についているのと、それ迄タイプを打った経験がないので大いに困った果て既知の東京外語のマレー・インドネシア語教授でジャワ古代語カウイ語（カウイとはサンスクリットで「詩人」の意）の泰斗ラーデン・プルワダルミンタRaden Purwadarminta教授のもとへ通って講習を受けた。そしてアラブ語の原稿はアフガニスタンの公使をしておられた北田正元氏が招来した元サウジアラビアの文部大臣をしていたというタウフィーク・シャリーフ・パシャTawfiq Sharif pāshā（当時の給料300円）〈昭和12年の公務員初任給が75円、銀行員初任給が70円だった [『値段史年表』朝日新聞社,1988] ことを考えると破格の待遇であったことが判る〉が囑託として雇われてこの校正を引き受けた。その間一時外務省の田村秀治〈1904-1988、外務省アラビア語研修のため1927年エジプト留学、中東諸国在任を経て1960-63年駐サウジアラビア臨時代理大使、68-71年駐サウジアラビア大使〉氏がこれに当たったこともあり、後に神戸の貿易商でペイルートの人、数か国語の出来るアブドゥル・ラヒーム・コレイラト氏Abdul Raḥīm Qulailātもこの校正に当たったことがある。この数人の手を煩わせた校正もやっと終わり、この『日本』Nipōnと題する雑誌の写真を入れての割り付け（ページ割り）には村田氏と是則氏が当たり、表紙の題字の「日本」には先出のイブラヒム翁を招いて書いてもらった。翁は筆者に竹の切れを用意するよう言われたので持って行くと、手ごろなのを選び先を割って書いてくれた。この雑誌は1号だけで、知る限りでは後が続かなかったようである。そして当時外務省ではペルシャ語による日本紹介文の厚い一冊本が国際文化事業部から出版されていた。

〈イスラム文化協会の研究部では月例会で研究成果を発表することになっていた。第1回(1937年6月)から第11回(1938年3月)までに発表されたテーマは、村上正二が「回教の支那伝来」、「回々教名称考」、「元代に於ける斡脱〈あつだつ〉商人について」、「明朝の回教」、「元代に来支せる回々人特に札馬刺丁について」、「チムール大王の支那遠征」の6本；八木亀太郎が「スーフイズムの発達」、「ペルシャの織物」、「ペルシャ語に於ける土耳其古語」、「ZandiqとZindiqに就いて」、「ペルシャ暦について」、「ペルシャ湾の今昔」、「ペルシャ湾沿岸の政治関係」の7本；山路廣明が「中世アラビヤの社会」、「契丹語の十干について」、「コーランに規定された不信心者」、「コーランの句説法について」の4本；内藤智秀が「オスマン・トルコ民族性に関する一考察」、「Haillart, Turkistan Solo」、「回教学序説」の3本であった。〉

一方日本語による季刊の『イスラム:〈回教〉文化』は僅か5,6号で終わりを告げたいらしい(国会図書館は第1輯(1937.10)―第6輯(1939.1)までを所蔵している)。この「イスラム文化協会」も一年余で店じまいとなり、翌昭和13(1938)年には、やはり外務省の外郭団体ではあっても人員は改まり、事務局も英国大使館裏に「大日本回教協会」として移った。

「イスラム文化協会」の〈会誌〉のアラブ語訳についてタウフィック氏の選んだ名称はthaqāfah al-islāmīyahであり、これを用いていたが、協会の名称が〈大日本回教協会〉と変わったのでこれを用いずjam‘īyah al-islāmīyah al-yābānīyahを用いるようになった。協会の名称が変わった頃筆者は外務省職員となり、週に二回連絡員として外務省から協会へ出向いた。後にこの協会が早大文学部へ移るまでの経路は次のようになる。

- ① 日本回教文化協会 → ② イスラム文化協会 → ③ 大日本回教協会 → ④ 日本イスラム協会 → ⑤ 早稲田大学文学部

筆者の関係したのは①から④までで、早大へ移行してからは文学部には関係しなかった。

〈筆者が⑤と考えている段階も、日本イスラム協会であるので、上の整理の仕方には問題がある。〉

後から見たのであるが、③の時代にアラブ語による画報と日本案内記(タウフィック氏の筆跡)が出版された。

話は逸れるが、阿馬土氏は横浜にある八聖殿に預言者ムハメッドを加えて九聖殿としたいと言っていたが、後そのようにしたと養父に知らせに来た。

〈八聖とはキリスト、ソクラテス、孔子、釈迦、聖徳太子、空海、親鸞、日蓮のことで、八聖殿は法隆寺夢殿を模した三層楼八角形の建物で1933年(昭和8年)に完成した。現在は横浜市が管理しており、ムハンマドの像はない。ムスリムは預言者ムハンマドを絵に描いたり彫像を立てたりすることを嫌うから、上の記述には何処かに誤解があると考えられる。阿馬土氏の理解が初め誤っていて話が変わったか、筆者の聴き方に問題があったのか、等。いずれにしても、結果は「八聖殿」でおさまったのである。〉

昭和13〈1938〉年に外務省調査第3課（ソ連班）内に蒙回班を設け、蒙古研究とイスラム諸国の研究を兼ねた班として仕事をはじめ、一室に蒙古班2名：小林高四郎氏（1905-1987、元慶応大学漢文学教授、『蒙古の秘史』）、足立区南光寺住職でシリシゴール滞在11年の橋本光宝氏（蒙古、チベット、サンスクリット各語）、回教班としては三橋富士男氏（1909-1999、慶応大学出身で東洋史、最初は西夏研究、後にトルコ史研究家となり、慶応大学、明治大学、千葉大学教授）、それに東大出身の田辺宗夫氏及び筆者の3名で、他に同室のソ連班二名が居た。そして回教班では『回教事情』（季刊）の発行をしていたが、これも5,6回の発行で終わってしまったと思われる〈第1巻第1号～第4巻第3号（1938.5～1941.12）まで全15冊が刊行されている〉。

この間レバノンから「自由の声」紙”*Şawt al-aḥrār*”の記者ムハメッド・タッバーラ *Muḥammad Ṭabbāra* が来室して、新渡戸稲造博士の『武士道』のアラブ語訳書を多冊外務省へ寄贈した。

故あって筆者は蒙回班からソ連班に移り、蒙回班は解散となり小林氏はトルコへ赴任して行った。

ここで代々木（富谷）に落成したモスクの話に移る。昭和13〈1938〉年春、代々木の富谷に回教学院（東京マスジド）が誕生した。その名は「東京第一回教寺院」*awwal masjid fi Tōkyō*で、その開堂式 *ḥafla al-iftitāh* は盛大に行われた。そしてこれを目指して世界各国の名士へ招待状を送ったのは誰であろうクルバンガリー師であった。しかしクルバンガリー師は既に国外に追放されてその姿を見ることもできず、師が期待していた寺院の落成式にも臨むことはできなかつた。そして中立の立場にあるイブラヒム師がその導師となって盛大な式典が行われ、サウード国王からは赤い表紙の大きいコーランが贈られ、その奉納式には筆者も出席した。

クルバンガリー師はある種の嫌疑からシベリヤへ追放となったが、家族は東京に残ったままで彼地で亡くなっている。クルバンガリー師の書類について、〈私は〉仲間割れした側の2名の娘と調べるように甲斐文比古事務官から依頼を受け、〈私は〉ペルシャ・アラブ両文、反対派のザキー氏の娘2名はトルコ文、タタール文の書類を調べたが、その中には何も怪しい文面がなかったのでその旨甲斐事務官へ報告しておいた。

〈クルバンガリーの精力的な各界への働きかけが功を奏して1937年10月にはクルバンガリーも参加して念願の東京回教学院の起工式が行われ、そして翌年4月に完工して、いよいよ5月12日に盛大な開堂式が行われる運びとなった。しかしその場にはクルバンガリーの姿はなく、実は1週間前に「スパイ容疑」で国外追放となっていたのである。これにはベルリンで活動していたカザン・タタール人アヤス・イスハキが1934年来日して反クルバンガリー（バシキール人）の動きを活発にしたことで在日タタール人社会（大半はカザン・タタール人だった）が分裂したことが原因だとも言われ、また親密だったグルバンガリーと日本陸海軍との関係が急速に悪化したためだとも言われる。詳しくは、松長昭『在日タタール人—歴史に翻弄されたイスラーム教徒たち』（ユーラシア・ブックレットNo.134.東洋書店、2009）などを参照。

東京に残されたクルバンガリーの家族、妻のオム・クルスーム（京城モスクのイマーム・ヤングラジエの娘）と息子のアサド(1938-?)は東京マスジドの直ぐ傍でひっそりと暮らしていた。クルバンガリーが追放されて亡くなるまでの34年間一度も会うことが許されなかつた。私は1985年頃渋谷区大山町のお宅を二度訪れている。クルスームさんは既に90歳に近く、それでもまだお元気でダンスの上から分厚いアルバムを4冊下ろして見せてくれ、(三菱銀行の)瀬下さんには大変お世話になったというような話をしてくれた。

傍にいた息子のアサドさんは東京大会でも上位に入賞したことがあるほどの将棋の腕前をもっているとのことだったが、アルバムを貸し出してくれないかという私の申し出を頑なに断るのだった。彼は直ぐ近くの東京マスジドではなく、少し離れたイスラミックセンターで働いていた。ムハンマド・アサド著『メッカへの道』の訳書（原書房、1983）もある。亡くなった今あのアルバムや文書類はどこに消えてしまったのか、永久に消滅してしまったのではないかと心配している。[と書き終えた2020年12月10日、東京ジャーミイに出かけて耳寄りな情報を得た。それはアサドさんの未亡人が杉並区で生活しているというのだ。クルバンガリーの遺品がアサド夫人の許に無事残っていることを願うばかりである]

1938年に完成した東京回教学院（東京マスジド）は、1986年老朽化のため取り壊された。土地や建物がクルバンガリー名義で登記されていたために法的手続きに時間がかかったものの、最終的にはモスク建設を条件にトルコ共和国に寄付することで解決した。トルコ政府は宗務庁が中心となりトルコ全土から多額の寄付を集め1998年に新たなマスジド建設が始まった。マスジドの建築資材や内外装を仕上げる100人以上の職人も派遣されて来た。2000年6月に開堂したオスマン様式のマスジドにはトルコ文化センターが併設され、正式名称は「東京ジャーミイ・トルコ文化センター」（ジャーミイと表記されている場合もある）。東洋一大きく美しいモスクだと評判である。ムスリム以外でも見学可能。ハラールショップもある。>

その頃アヤス・イスハキ氏 Ayād Ishāqī は中央アジア及び満州各地に拠点を置き、奉天（今の瀋陽）では「民族旗」社を経営して、多分週刊紙だと思うが新聞紙1頁大の報道紙『民族旗』" *Milli Bairak*" 〈1935.11~1945.3、欠号はあるものの、そのほとんどが島根県立大学「服部四郎ウラル・アルタイ文庫」に残っている〉を発行し、全部アラブ字体で、最初のうちは筆記体であったが、後に戦争前になると活字体に改めた。ここからはこの他に在満のタタール人の子弟教育のために各種の教育材料をも作成したり、刊行したりしていたが、中央アジアの拠点からは『新民道』誌 "*Yāgā Milli Yūl*" を発行して活動していた。阿馬土氏はクルバンガリー師とは親しくなかったらしいが、時たまイスハキ氏の話は口にしていた。イスハキ氏は東京方面へも手を伸ばしクルバンガリー師一団の中から自分の派へ引き入れようとしたために、クルバンガリー師一団が仲間割れを起こし、例えばクルバンガリー師から離れて新モスクのムアズズィン（アザーンを唱える呼僧）となったのはガリー・ダシキン氏 Ali Dashkī であり、この人が他界後はクルバンガリー師派のガイナン・サファン氏 Aynān Şafā であった。イブラヒム師は戦争直前に約3年間、秘書のハリーマ・スズキ（鈴木清子女史） Hālima Suzuki を伴って満州へ行った。

東京モスクでイマームの空白を補ったのは、やはりトルコ系のモハメッド・アミン氏 Muḥamed Amīn であった。この人は筆者が戦後一時外務省から入国管理部（Control Locater Files）へ移行した間に出国してメジナへ向かった。その後ガイナン・サファン氏はムアズズィンからイマームになったと話したところまでで在日タタール人の事情については筆を措く。

では「大日本回教協会」でどのような仕事をしていたかといえば、雑誌では『回教世界』の刊行をし、その編集には赤沢氏が当たり、必要あってのアラブ語タイプには淀繩泰子氏が当たり、アラブ語の講師としては菊地慧一郎氏、その世話役として須田正継氏（山梨県の人）〈1893-1964、シベリヤ出兵（1919）軍のロシア語通訳として参加、先の戦争中は呼和浩特に「須田公館」を設けて諜報活動を行った。ムスリムで戦後甲州市の文殊院隣接地にイスラム霊園を設置するために尽力した〉が活動していた。そしてカイロのアントン・エリヤス出版社からエリヤス「ア・英辞典」〈 *Elias' Modern*

Dictionary: Arabic-English》を多冊買い込んで必要に供していた。この頃中央アジアのロストフ〈中央アジアと区分してよいか問題はあるが、黒海につながるアゾフ海と接するロシアの州。タタール人が多く住むウクライナ領クリミア半島に隣接する。クリミアは旧ソ連の一部となっていたが1954年にウクライナに返還された。ロシアのプーチン政権は2014年再びロシア領として併合を宣言したが国際的には認められていない〉からムーサ・ジャルラー氏が来日し協会へ寄ったこともある。もうこの時分になると「イスラム文化協会」の人々の姿は内藤博士以外会うことがなくなった。菊地慧一郎氏（元浅草女子商業の校長で『オリヂナリティ』の著者）は神田駿河台の明治大学横裏坂上にある佐藤〈新興〉生活館〈現在の山の上ホテル本館〉でアラブ語の講習を行う一方、アラブ語の古文を読むのに欠かせないスタインガスの辞書〈F. Steingass, *Arabic-English Dictionary*〉復刻〈版〉を大東亜出版から発行した。そしてその講義の内容は協会発行の『回教世界』に「韋駄天アラビア語」として掲載された。

ではその後この協会は怎么样了か。戦争中にこの協会は解散状態になったらしく内藤〈智秀〉博士は困ったらしいが、引き受け手が中々見つからなかったところ、大村謙太郎氏（学習院大学出身、東洋史・朝鮮史）が引き受け、名称も「日本イスラム協会」と改め、渋谷の松濤町に置いたものの、直後に氏の自宅のある中野の野方〈現在の中野区丸山町2丁目〉に移し、助手に漫画家の宮崎という女性を置いて別宅の管理を依頼した。

この時分の理事としては陸軍中将四王天延孝〈前出、退役して衆議院議員〉氏、早稲田大学教授松田壽男氏〈前出、東洋史・中央アジア〉であった。松田教授には大学以外では逢わなかったが、大村〈謙太郎〉氏は四王天氏を陸軍中將とは言わずユダヤ問題研究者として紹介した。この協会へは若いイスラム関係者がよく集まって談話サロンのような風を呈していたが、或る時午後一人の老人の来訪を受けた。この老人はいきなり間違った発音のアラブ語の一節を唱えたが、それはコーラン第6「家畜の章」の第79句とその間を飛ばして唱える第162-163句であることがわかったが、この人こそ日本で最初にメッカ巡礼をしたオマル山岡光太郎〈1880-1959〉氏（東京外語ロシヤ語科出身）であり、「回々教の神秘的威力」の著者アブドゥル・ラシード〈トルコ語読みでアブデュルレシト〉・イブラヒム師の指導を受けて巡礼を果たした人であった。後に氏は大阪の老人ホームで死亡した。

大村氏はムスリムではなく、熱心な日蓮宗の信者であった。そして協会所蔵の書籍の中には大日本回教教会から引き継いだもの、トルコのトンガン教授の寄付したトルコ文の新聞等雑多なものが含まれているが、上述レバノンの詩人コレイラート・ベイの寄贈書は大半失われており、了翁文庫という寄贈者不明の図書も含まれている。これらは後に早稲田大学図書館へ移された。

〈これらの資料は現在早稲田大学中央図書館特別資料室に保管収蔵されている。その概要については店田廣文「戦中期日本におけるイスラーム研究—早稲田大学図書館所蔵「イスラム文庫」の概要と研究課題—」『早稲田大学人間科学研究』15(1), pp. 85-90, 2002 で知ることができる。未整理の文字資料も相当数残っているようだが、写真の多くはCD-ROM化されている。〉

このイスラム・ブームの時代において、個人でイスラム研究または一種の運動に携わっていた人は阿馬土氏の他に知る限りでは中国上海から帰国したエリヤス・佐久間貞次郎夫妻であった。この人は上海で『回光』"nūr al-islām" 誌を発行し、阿馬土氏とは親交があった。氏は戦後英文で"Green Flag" 誌を発行し、居を西武線の沿線に移したまでしか分かっていない。

一方、都電大塚仲町から入った大塚へ向かって左側の小径の左側にテニス・ラケット等運動具の製造工場を営んでいた工場主の中村正勝氏も小規模ながらイスラム研究会を―氏は神田の「アラビア・トルコ学会」でクルバンガリー師よりアラブ語を学んだ―沼津市在住の中国から帰還したアブー・バクル長倉氏と提携して行っていた。一度工場（会）を訪問した際、中村氏から居合わせた中岡良一〈なかおか・こんいち[山手線大塚駅の転轍手]1921年11月4日当時の首相原敬を東京駅で刺殺、無期懲役となるが34年恩赦で出獄。満州へ渡り、37年神戸モスクでムスリムとなった〉氏を紹介されたことがある。その後沼津へ長倉氏を訪問に行ったが、住居が発見できず、途次雷雨に遭って空しく引き返したことがある。この人は中国語、アラブ語ができた。この話を聞いて、後に小村〈不二男〉氏が長倉氏を訪ねたが、時既におそく氏の他界した後だった。これで思い出したが大日本回教協会時代、法政大学フランス語教授田頭敏氏も関係しておられたが早く亡くなられた。後中村氏は池袋の先の熊野（ゆや）付近に転居された。

〈村上正二氏〔前出〕からいただいた手紙に「早く亡くなられた飯田忠純氏〔前出〕などは、小生は最もアカデミックな初期のイスラム学者だったのではないかと考えています。また、イスラム学そのものではないけれども、宮本百合子の最初の良人であった東大講師（ペルシャ語・文学）の荒木茂〔1884-1922〕氏―八木亀太郎の先生―も活躍していたはずです。戦争が起こってから、資金面で軍部関係から援助がでるようになり、ゆがめられていったのですが、やっている当人たちはむしろ軍国主義とは全く無関係で、好きなことをやっているという感じでした」とあった。

なお、四王天延孝会長期の大日本回教協会には、古在由重（1901-90、唯物論研究会で活躍し33年・38年2回治安維持法違反で検挙されたが戦時を切り抜け、敗戦後は民主主義科学者協会で活躍、名古屋大学教授となる哲学者）が勤務しており、イブラヒム師に私淑していたが、筆者の視野に古在はまったく入ってこないことが注目される〔『古在由重著作集』第6巻所収「戦中日記」、勁草書房。〕

戦争も末期に近づいた頃、外務省ではボルネオ駐在だった池田公使から、〈筆者を〉ボルネオへ派遣するという通知が（間接的に）あったので、港区高輪四丁目開東閣〈伊藤博文邸宅地に建てられた旧岩崎家高輪別邸。現在は三菱グループのクラブとして使われている〉の後ろにある池田公使邸を訪ねたところ、もうすぐボルネオから山路〈一行海軍〉大佐〈この頃バリクパパンの海軍第22部隊の参謀長〉が迎えに来るからそれまで待つようにとのことであつたが、いくら待っても通知がないうちに応召（昭和20年2月14日）ということになり、戦後ややあつて〈筆者は〉高輪四丁目へ移ったものの再び公使邸を訪れることはなかった。この時期の出来事と言え、その後拓殖大学出身でアズハル大学出のアル・ハッジ・ケルベラーイ・オマル・ファイサル小林哲夫〈1911-44、セレベス島マカッサル沖で戦死〉氏が朝日新聞の記者と同乗してボルネオに向かう途中マラッカ海峡かスダ海峡かの上空で米戦闘機の攻撃を受け、搭乗席の上で二名ともうつぶせになって遭難したとの報道があつた。筆者のボルネオ行きの話は、ほとんど毎朝〈外務省〉蒙回班へお顔を見せるソ連関係の佐々木総領事から伺ったものと記憶している。

本題は昭和初期と区切つてあるので、それ以降のことは割愛するが、ヤマン（トルコ読みではイエメン）のフセイン殿下のご帰国に際しては新疆省から来日していたマフムード・ムヒーティー氏 Maḥmud Muḥīṭī を伴つて歸られた。（平成11〈1999〉年1月14日記）



日本イスラム協会理事長 大村謙太郎氏



東京回教寺院開堂式に出席したイエメン王子フセイン殿下



محمد عبد الحى قريانعلي (كولمبانگاری-شہ)
مؤسس و مدرس المدرسة الاسلامية

クルバンガリー師



1938年開堂式に臨む（右から）イブラーヒム師、フセイン殿下、ギプシー宗教大臣
（山路廣明氏撮影）



駐英サウジアラビア公使シェイク・ハーフィズ・ワハバ閣下（日比谷公会堂にて）



（右から）葛生能久、加藤久、シュクリー・ベイ、ワハバ・サウジ公使、笠間泉雄公使、頭山満イブラヒム師、フサイン殿下、ギブシー大臣、アブー・バクル、カーディーアリー・マムリー知事、齊藤書記官、山路廣明、中国回教徒、廣田弘毅外相

